

丹沢大山と秦野の修験

— その歴史と伝説

はじめに

秦野と大山修験の繋がりを知るきっかけに

かつて丹沢では山伏が駆け、修行し、里に下りて祈禱を行うなどの活動をしていました。令和四年（二〇二二）にユネスコ無形文化遺産として登録された四十一件の「風流踊」のひとつに山北町の「山北のお峰入り」がありますが、お峰入りの名は修験道の入峰修行を意味するもので、山北のお峰入りはこの入峰修行が里の人々の中で芸能化したと考えられています。山北町と丹沢山地の塔ノ岳で接している秦野市も、大山御師の村である蓑毛など修験道と縁の深い地域でした。この展示では、大山修験の歴史と概説から、秦野に存在した修験道の痕跡を、現在残されている文字資料や画像から紹介していきます。秦野の歴史を語るうえで欠かせない大山と修験道を知るためのきっかけとしてご覧ください。

修験道とは何か

修行で験力を得て自他の救済を目指す

古来より山は人々へ恵みをもたらす神が住む霊地として崇められ、山麓や山頂で祭祀が行われました。奈良時代になると仏教僧が山林修行を行うようになり、その拠点として山岳寺院

があらわれます。平安時代初期には、唐から帰国した空海などがもたらした密教が山岳信仰や修行に結びついていきました。このように、山岳信仰に仏教（特に密教）・神道などが融合した宗教体系が修験道です。それを実践する人々は修験者、もしくは山伏と呼ばれます。特定の教祖の教えにもとづく宗教とは異なり、修験者は厳しい山岳修行で心身を修練し、常人では持ちえない能力である験力を得て、人々の救済を目指します。

開祖・役小角

丹沢でも祀られた古代の宗教者

修験道の開祖とされているのが奈良時代の役小角です。大和国（奈良県）葛城の人とされ、出家しない在家の宗教者である「優婆塞」と呼ばれる人々でした。紀伊国（和歌山県）熊野から大和国吉野まで続く大峯山を中心に活動しますが、文武天皇三年（六九九）に人々を惑わしたという罪で伊豆の島へ流罪となります。二年後の大赦により帰国しますが、その年のうちに亡くなりました。鬼神を使役していたと伝えられ、江戸時代には天皇より神変大菩薩の名を送られています。修験の寺院や霊場には役行者像が安置されることも多く、丹沢でも行者岳に役行者の石造が祀られていましたが、現在は像が描かれた石碑が置かれています。

○東大寺要録

根本僧正諱良弁

僧正者相模国人漆部氏持統天皇

義淵

僧正弟子金鷲菩薩是也天平五年建金鐘寺

出典：国文学書館デジタルアーカイブ（内閣文庫）

○東大寺縁起絵詞

ケコン ニウヘンソウ サカミノクニヲロスミヲコラリウシクホ イノトコロノウルシ
花巖ノ良弁僧正ハ相模国大隈郡漆窪ト云所ノ漆
ハノウチノヒトナリチャクフク ハト ヌメ シヤモンキタ ムナイトル
部氏人也着服セントテ母ノ夢ニ一人ノ沙門来テ向居ルト
ミハ チトウシテアラワチ タシヤウ ヤウニ トキヨシキ
見ヘケリ持統天皇治三年己丑誕生ス嬰兒ノ時金色ノ
ワシト クモ シシキニシ サシ トヒサル
驚取テ雲ヲ凄キ西ヲ指テ飛去ニキ（カナは原文のまま）

出典：「永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻」

『同朋学園仏教文化研究所紀要』九号一九八七

【解説】

「東大寺要録」は、平安時代後期の嘉承元年（一一〇六）に編纂されたものを長承三年（一一三四）に整理・加筆された記録です。編者不詳で、原本は現存しません。ここでは国立公文書館が所蔵する江戸時代の写本を引用しています。

「東大寺縁起絵詞」は南北朝時代の建武四年（一三三七）年に作成されました。詞書のみで絵はなく、何らかの事情で絵巻とならなかったようですが、室町時代に作られた東大寺の「大仏縁起絵巻」などはこの絵詞をもとにしていると考えられています。原本は現存せず、引用した文は、最古の写本とされている史料を解読し活字にした翻刻です。

良弁の出身地は、近江国（滋賀県）、相模国（神奈川県）鎌倉の由比という説もありますが、東大寺の資料によれば、出身

氏族は相模国の漆部氏、さらに大住郡漆窪という記述があり、秦野市北矢名の漆窪という説も有力です。父親が漆部伊波（染屋時忠）とする説は、伊波と良弁の活動時期が親子にしては近すぎるために検討の余地はありますが、いづれにせよ同氏族と考えられます。

鎌倉・室町時代の修験と大山

修験教団の形成、体系化が進む

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』が記すところによると、幕府將軍の源頼朝と三代將軍の実朝が大山寺へ領地を寄進し、北条政子が安産祈願をした二十七社の中に大山寺が記されています。その後、寺は一時荒廃しますが、鎌倉時代後期に真言宗の学僧である願行房憲静により復興しました。修験の全国的な流れとしては、鎌倉時代末から室町時代に組織化が進み、聖護院門跡を中心とする天台宗系の本山派と、醍醐寺三寶院を中心とする真言宗系の当山派が形成され、この二つが修験の主要な宗派として後につながります。この頃から大山でも修験の勢力が強まったと思われる、南北朝時代には足利尊氏の軍に大山の修験者が属し交戦した形跡も見られます。

戦国時代の大山と山伏

戦国大名の任務を担い、政治的な介入も

宗教活動のために日本中の山岳を縦走する山伏は、領国を巡り群雄割拠する戦国時代には為政者の使者として他国へ行くこともありました。相模国の支配者である北条氏も、越後の上

杉氏へ出羽山伏を使者としたことがあります。北条氏は、それまで聖護院門跡の直下で修験者をまとめていた年行事職ねんぎょうじしきに北条氏の認定を必須にするなど修験集団に介入し、これにより大山など相模の修験寺院は小田原の玉瀧坊ぎょくたくりゅうぼうの統制下におかれしました。玉瀧坊は、享祿元年（一五二八）に北条氏綱へ堺の鉄砲を進上したことが関東で鉄砲が広まる始まりと『北条五代記』に記されるなど、早くから北条氏と繋がり、情報入手などで貢献していたようです。

江戸時代の大山と修験

家康による山内肅清、明治時代に修験道廃止

天正十八年（一五九〇）の小田原合戦で、大山の修験者たちは北条方で参陣するも敗戦しました。その後に関東へ入部した徳川家康は大山の「山伏衆」の振る舞いを問題として一掃し、大山寺別当の八大坊を中心に、複数の宗派が属していた大山を真言宗にまとめます。この改革により山を下りた者は蓑毛や坂本（伊勢原市）に移住、宿坊を営む御師として布教活動をしていきます。江戸時代中期（十八世紀）以降は庶民の



蓑毛村大日堂春日社『相中留恩記略』国立公文書館蔵

物見遊山や寺社参詣が盛んになり、大山には多くの人が参詣に訪れました。やがて徳川幕府が大政奉還し明治時代になると、それまで一体とされていた神道と仏教の分離が進められます。神仏習合で成っていた修験道は明治五年（一八七二）に廃止令が出され、修験者や寺院は天台宗・真言宗・神道のいずれかの宗派に属すか、帰農をすることになりました。

大山寺縁起絵巻

中世に作られた大山寺の由来を語る絵巻

『大山寺縁起絵巻おほやまでらえんぎえまき』は、大山寺の開祖である良弁僧正の生い立ちから大山寺本尊の不動明王を造立する由来や、人々の信仰を集めた様子を描いた絵巻です。原本はなく、いくつかの写本が現存します。展示の画像は平塚市博物館所蔵の資料で、巻末の奥書に室町時代の享祿五年（一五三二）と記され、現存の写本の中で最古とされるものです。ただし、縁起そのものは鎌倉時代末期には存在していたと推定されています。描かれている良弁の出身地は、この縁起の解釈などにより鎌倉由比のという説もありますが、先の章で記したように秦野地域の出身という説も有力です。

（以下、絵巻を抜粋した訳文）

相模国司太郎大夫時忠

観音像を造立し子授けを祈願

昔、相模国の国司に太郎大夫時忠という人がいた。裕福で仏教への信仰心が篤い人だが四十歳になっても後継の子に恵ま

れず、願い事を叶えるご利益に優れるという如意輪観音像を造立し、子が授かるように妻とともに祈願する。

夢に弥勒菩薩が現れ男子誕生、しかし：

ある夜、夢に八十歳ほどの老僧があらわれ、霊山の釈迦だとな乗り、弥勒菩薩の教えであると法華経一巻を渡される。妻も同じ夢を見ていた。やがて子ができていることが判明。ほどなく菩薩のような男子が誕生し、夫妻はもちろん、国中の者が祝福した。しかし生誕から五十日目、乳母がその子を抱いて野原にいと、金色の鷲が飛来し、男子を掴み飛び去ってしまった。必死に探したが見つからず、夫妻は嘆き悲しむ。

奈良の覚明上人、夢を見た後に山で赤子を見つける

奈良の都で仏教に優れた学僧として知られる覚明上人は、弥勒菩薩が来臨して大寺院を建立する夢を見る。起きて早朝に山へ入ると、楠の木の枝の間から子の鳴き声が聞こえ、金色の鷲が人の子を抱いていた。奪い取ろうとしたが叶わず坊へ帰り、持仏である不動明王へ「夢に見たことが誠であれば、五体を失わずに得させたまえ」と七日間祈りその木へ行ってみると、どこかから一匹の猿があらわれて上人へ捧げた。錦の産着を着て裏に誕生の年月を記していたが、あちこち尋ねても父母は見つからず、上人は子を「金鷲童子」と名付け大切に養育する。童子は成長し良弁と名乗る

ついに東大寺の門前で時忠夫妻と対面

成長した金鷲童子は特に文筆に優れ、仏や菩薩の化身であるかに思われた。その信心の力は天皇（聖武天皇）まで届き、大

伽藍を建立し仏法を修行したいと願うと天皇は喜ぶ。出家して良弁と名乗り、やがて東大寺となる大仏殿を建て、華嚴宗が起こった。一方、時忠夫妻は子を日本中で探し回ったが見つからず、由比の住処に戻ってみるが、そこは荒れ果て、留まっても仕方がないと西へ行く。そこで良弁が鷲の巢から取り出された人と聞き、もしやと会いに行くが、稚児法師らから追い払われてしまう。門前で小屋掛けをし伏していると、内裏から帰った良弁と出会い、親子はようやく対面を果たした。

親子で相模へ帰った良弁、大山の不思議な話を聞く

親子の話は世間に流れ天皇にも届き、夫婦は良弁とともに御前に参る。その話に天皇は涙を流し、時忠へ昔と同じ相模国司に任じて吉日に下向するよう命じた。良弁には今後仏法興隆を頼みたいと下向を渋られたが、良弁は「自分の生国であり、仏法を広め衆生に恵みを与えられたらまた上洛します」というと、天皇は下向を承諾する。やがて相模国鎌倉由比郷へ着いて、あるとき良弁は土地の者にありがたい奇跡が起こる場所はないかと尋ねる。「不思議なことなら西の大きな山です。頂上から光が差し、当国・安房・上総の三ヶ国を照らすことがよくあります」という。

良弁は大山に登り不動明王像を発掘 次々と奇跡が起こり、その後も大山寺は興隆する

民はその山が険しく悪鬼などの住処であると止めたが、それでも良弁は自ら国中の者を先導して登る。山頂の発光地点から金色の不動明王像が出現し、良弁が加持を施すと像は蘇った。

不動明王がいうには、この山は弥勒菩薩の浄土であり、菩薩が来臨し衆生利益を与えているとのこと。その後も大山大山で祈禱を続けた良弁には数々の奇跡がおこる。かくして大山大山には多くの奇跡や不思議があり、仏や菩薩があらわれ、現在も人々へ恵みを与えている。良弁は三年滞留したが、その後天皇からは安房・上総・相模の一部を寺領として下され、寺はますます興隆した。

大山大山不動靈験記の秦野

江戸時代に大山大山御師が広めた語り

『大山大山不動靈験記』は寛政四年（一七九二）の刊本で、大山大山寺塔頭である養智院の前任職である心蔵が、自らの見聞や大山大山の学僧・御師や庶民等からの聞き取りをもとにまとめたものです。全十五卷百三十一話が記され、第一卷（一〜六話）は開山の良弁・中興の願行の略伝、鎌倉時代からの大山大山の造営・修理記録、年中行事などの概要が記されています。第二卷以降は靈験譚で、どのような行いで大山大山不動明王のご利益を得られるかが記されています。遠くは奥州など具体的な地名や人名も記される多くの靈験譚の中から、秦野市内に関わる話を抜粋して紹介します。

（以下は訳文）

相州長軒（名古屋）村

市五郎の乱気が不動へ祈り平癒した事

相模国大住郡長軒（名古屋）村の山谷の百姓に治右衛門と

いう者があり、一子である市五郎が十六歳の春頃から病気で狂った様子になった。いつもは真面目に生活しているのに病を発する時はうわごとを言いつつ駆け走り、騒いで人目をばはかることもない。数多の妙薬を使うも治療の甲斐なく、両親はひどく悲しんだ。空を行く鳥すら我が子を思えば翼を落とすし、地を走る獣も子のために冥路に迷う習いもあるし、まして一人子の男子であれば蝶や花のように成長を楽しみにしてきた子である。治右衛門夫婦はなす術もなく、片時も安らぐこともなく嘆き悲しんでいた。安永八年（一七七九）巳亥の春、突然、信心の心をなくして薬湯で癒すべきではないと思い、心身を清めて大山大山へ祈願に行く。子の病気が回復したら大山大山へ七度登り祈願を果たしますと心願をこめ、寺の常住に慈救呪（不動明王の真言）を唱え奉り祈った。同年の七月の石尊の祭礼になり、病人が少し心地よくなったように見えたので、夫婦一緒に、十八歳になった市五郎を連れて大山大山へ参詣し不動尊を拝み、山をおりたところ、石の上にて鼻紙袋を一つ拾う。親子ともに正直で無為な人なので、参詣の人々へ誰か落とした人はいないかと時が移るまで心を尽くし尋ねたが、落とした人はいなかった。仕方なく懐中に入れて家へ帰ったところ、その時から病は全快した。今は堅固に家業を励み、ますます信心を増している。この鼻紙入の内には、数は不明だが金銭が入っていたとも隣郷の横野村甚左衛門の話を聞いた。考えてみると、この者は貧しい家で少し借金ができたことを苦に思っただけを乱したのかもしれない、もしかしたら信心によって平癒しただけではないかもしれ

れない。福を得て安穩に世を送ることはありがたいことである。
相州大槻村唐獅子鳥羽藏

不動尊を信じて力を得たる事

正徳年中（一一七一〜一七六二）の頃。相州大住郡大槻村に鳥羽藏という相撲取がいた。天性の優れた力量があり、身長は六尺五寸（約一九五センチメートル）あまり。江戸小浜氏に召し抱えられ、東都に於て一・二を争う、唐獅子という関取を名乗る相撲取だった。ある時、深川八幡の相撲のとき、水野氏の屋敷へ奥州南部より召し抱えられた土蛛という相撲取がおり、唐獅子より一段勝っているように見えた。土蛛は唐獅子に勝負を望んだが、翌日の勝負と決まる。その日は唐獅子への勝者が一人もなく土蛛は悔しがった。その日の相撲が終わり宿所へ帰ると、双方の主人は気を強くし「明日の勝負に負けたら解雇する」との旨を申し渡す。唐獅子は、命がけで相撲をするのはまさにこの時だと考えた。普段から大山不動を信仰していたので、帰るとそのまま垢離（冷水を浴びて心身を清める）をとり、大山の方へ向かい「明日、土蛛との勝負に負けないよう力を授けたまへ」と一心に祈り、仏の名を唱えて寝た。暁の頃の夢に、大木が我が身に倒れ掛かるのを左の方へ身を除けてその場の難を逃れたという夢を見て目が覚めた。これは明日の相撲のお告げだと思い、また早朝に身を清め本尊を拝し相撲に出た。再び唐獅子に勝てるものが東の方におらず、土蛛が土俵へ上る。見物人が固唾をのむ勝負となり、唐獅子が左の方へ身を回し、土蛛を土俵の外へ引き倒し勝利した。見物人の褒める声は半時

（約1時間）ばかりも止まず、主人も賞賛する。この名譽が四方に振るったことから、その時より音右衛門と改名した。その後はますます力を増し、あたかも那羅延金剛（仁王のひとつ）の力を得たように、京大坂へ上つても一度も負けなかった。巧みな技も新たに出し、諸人に指南しているという。これは小泉住右衛門の話を書いて記した。このように高名を振るわせたことも信心あればこそである。

相州田原村林左衛門の二子

不動へ祈り愚鈍の病を滅除する事

相州田原村に林左衛門という者がいた。その子は長々と病苦のあげく菽麦を弁せぬ（豆と麦の区別もつかない）馬鹿者となつてしまったので、林左衛門も憂い悲しんでいた。四方の医者を迎えて治療しようとしたが、薬や灸の治療は少しの験もなく、あちこちの修験者に頼みさまざまな祈祷立願に尽くしたが少しも快氣を得ることなく、できることもなくなり、これは宿業であるとも思っていた。このように病を除く方法を探っていたのに、どういうわけか大山不動の靈像が眼前に御座することを思い当たらなかつた。あるとき、ふと不動尊のことを思い出し、大山へ参詣して寺中へ立ち寄り、中之院という寺で我が子の病氣本復の祈祷を頼み、不動尊へ立願するなど、真心で信心することを肝に銘じて祈念し奉ると、不思議なことに我が子の病悩がたちまち快方に向かい、かえつて以前よりも利発になつて大きな智を得たようになり、無病息災になった。実に大聖（大山不動に対する尊称）の加被力（神仏の慈悲の力）は施主

の信心力であり、そこに行者と修力との三つの力が相和して難治の病根を祓った。速やかに願いを叶えるのは、仏の言葉に偽りがないからである。このことは天明元年（一七八一）辛丑五月二十八日に林左衛門が自ら中之院へ来て、礼護摩（願いが叶った時の御礼参り）を修し、柳村の源藏へ話した物語である。**相州落幡村利左衛門の信心により村中の田畑が洪水を受けなかつた事**

相模国落幡村は土地が低く、神戸川より田畑へ水が押し来る場所である。それゆえに落幡村と金目村の両村の田畑に洪水を防ぐため高く築いた土の堤がある。そこに寛政三年（一七九一）亥の八月五日の朝より雨が降り続き、六日は大洪水になった。落幡村の百姓老若が出て、水除が切れないように溝を掘り水吐をつけたが、あたり一面が水だらけになってしまった。その日の七ツ時（四時頃）に人々が土堤を登ってみると、他村の土堤は竹が生い茂り竹根で土堤をしめて堅く見えるが、落幡村の土堤は柔らかさそうで、とても耐えられないだろうと人々はあきらめ家に帰ってしまう。だが、利左衛門の父子が二人で土堤の上に残り大山不動へ祈願をした。「南無大山大聖不動明王、今この土堤が切れたら落幡村の百姓は田地に稲一粒も得ることができません。なにとぞ願いをお聞き届けいただき、お救いください。宝前の御庭草を踏み護摩供修し大恩に感謝し奉ります。それが叶わず事が起きるならば、我ら存命して自他の憂き目を見るより、只今、命をとりたまえ」と親子で手を合わせ、大山大聖不動明王と一命をかけて法号を唱え、村の土堤の上でひた

すら頼んだ。すると不思議なことに落幡村の土堤は切れず、他村の大土堤は流れてしまった。田畑も難なく水がひいたので、親子は喜び、知らせを受けた村人も喜んだ。翌日七日の朝、利左衛門は早朝に起きて大山の方に向かい跪いて合掌し拝し、すぐ支度して大山不動へ参詣した。大山もまた洪水の被害で道や橋が壊れ、村人二、三人を伴ってようやく大山へ参詣し、謝礼の護摩供を修し、自ら広徳院憲海へ話したことである。

御師の村・蓑毛

山を下りた修験者が移り住んだ大山登山口

蓑毛集落の起源は、奈良時代に大山を開いた良弁に従ってきた三名のうち二人が蓑毛に住んだことによるとされ、江戸時代の『新編相模国風土記稿』に記されています。現在も大山の登山口として知られています。江戸時代には大山詣りの人々を案内し宿泊などの世話をする御師（先導師）が住んだ集落です。同じように御師の集落で大山の東の入り口にあたる坂本（現在の伊勢原市大山）に対し、蓑毛は西坂本ともよばれました。大山の南の入り口として主に駿河や伊豆（静岡県）方面からの参詣者が利用し、富士山から蓑毛を経由して大山へ、次に東へ下り江の島へ、と三所を一緒に参詣する道順も一般的でした。

堀村の修験寺院

尊仏山の麓にある三ヶ寺

塔ノ岳（尊仏山）の麓にある堀山下村には、『新編相模国風土記稿』によれば、江戸時代に三つの修験寺院が存在し、三寺

とも本山派で小田原玉瀧坊の下fにありました。

○城光院……大蔵山育寶寺と号し、創始は平安時代とされます。鎌倉時代の文保二年（一二三二）に北条（赤橋）守時による下文で堀村の村内にある薬師堂の院主職に任じられているものの、『風土記稿』によればその後の事績は不明で「今甚衰微せり」と記されています。

○城入院……金曜山大泉寺と号し、創始は鎌倉時代としています。

○圓覚院……城入院から分院したとされています。

渋沢村吉祥寺

近郷で十七の末寺を持つ当山派の寺

渋沢村の吉祥寺は皇牛山を号し、京の醍醐寺三宝院を本寺とする当山派の寺院です。『風土記稿』によれば近郷で十七もの末寺を持っており、秦野市域では曾屋村玉宝院、同村学禅院、同村東昌院、名古木村明覚院の四寺が吉祥寺の末寺と記されています。開山は安土桃山時代の文禄三年（一五九四）に寂した般若とされています。ただし、『風土記稿』の成立より約五十年前の天明六年（一七八六）に記年のある醍醐寺三宝院へ山寺号の下賜願い状が伝わることから、修験当山派の寺として活動するのは江戸時代のこの時期からである可能性もあります。

○安永六年（一七七七）七月寺号下賜願い状

乍恐書付ヲ以奉願上候事

一相州大住郡渋沢村修験此度入峯仕御殿江差上り山寺号
戴頭仕申度段奉願上候、尤牛頭天王社式畝程之社地所持仕

候修験ニ而御座候、以御慈悲右願之通山寺号被仰付下候

ハ、難有仕合奉存候、依之乍恐願書奉指上候、以上

安永大丙七月日

相州大住郡渋沢村

米倉千之丞知行 名主武兵衛

三寶院様御内

御家司中様

出典：『秦野市史 第一巻古代中世寺社史料』

【解説】

渋沢村名主の武兵衛が入峯（山へ入る修行）にあたり、当山派の本寺である醍醐寺三寶院へ山寺号の下賜を願っています。当山派が入峯修行をする大和（奈良県）の大峰山（おのみねさん）で修行を行ったでしょう。さらに、式畝（約一九八平方メートル）の牛頭天王社を所持する修験者であると主張しています。

丹沢・大山と秦野の修験

—その歴史と伝説

令和6年9月3日(火)~10月27日(日)

〒259-1304 秦野市堀山下 380-3

はだの歴史博物館

TEL：0463-87-5542

FAX：0463-87-5794